

優秀賞

ぼくとまる

茨城県 日立市立豊浦小学校一年 岡田 龍乃

六がつのあめのひ、ぼくのいえのにわに、ちゃいろいねこがきました。

「なあーなあー」となっていたので、おかあさんがごはんをあげました。

あるひ、ぼくはねこがひだりめをけがしていることに気がきました。

おとうさんが、おおきなあみでつかまえることになりました。しかし、おおあばれでなかなかつかまりません。やっとつかまえたときには、おとうさんのてはちだらけになっていました。

どうぶつびょういんにつれていくと、じゅういさんがやさしくみてくれました。そしてけがをしているひだりめをみて、

「このめは、もうみえていないよ。」
といいました。

ぼくはとてもかなしかったけど、そのぶんぼくが

かわいがってあげようとおもいました。

ねこのなまえは「まる」になりました。

ぼくはまいにち「まるー」とよんで、ケージのすきまからのぞいていました。でもまるは、じっとしていてうごきません。

ケージのそとにでてくるまでに、ニしゅうかんはかかりました。

ぼくは、そのあいだずっと「はやくさわりたいな」とおもっていました。

ぼくは、あのとときまるが、うちのこにならなかつたら、いまごろどんなふうだったかなとかんがえました。たいふうのときは、いつもあめにぬれないように、かぜにとばされないようにしなくてはいけないし、あついひはのむみずがなくて、みずたまりのきたないみずをのむしかなかったのかな。

「まる、うちのこになってよかったね。」

ぼくがよこをとおっても、まるはにげずにじっとしていることがふえました。そっとてをさしだしてみると、ぼくのてのにおいをくんくんとかぐようになりませんでした。

あるひぼくは、ゆうきをだして、まるのあたまをなでてみました。まるは、すこしだけびくっとしてから、めをつぶりしました。

はじめてさわったまるのおでこは、あたたかくてふわふわで、ぼくは、できるだけやさしいちからでなでました。いつもはたっているみみをぺたんこにして、ぼくのほうにしゅうちゅうしているようでした。

のどから、ごろごろというおどがしました。まるはどっともうれしそうでした。

ぼくは、こころのながうれしいきもちでいっぱいになりました。

「まる、うちのこになってくれてありがとう。これからはちいさくしっぽをふりました。」

